教育実践研究　第26集（2016）　253－258

［教育方法一般］

保・幼・小の連携を通して円滑な接続をめざすプロジェクトの取組

内藤笑美子*

1　はじめに

小学校入学期における子供たちは，期待と不安でいっぱいである。小学校に入学した喜びで張り切っている子供たちが多い。しかし，中には，学校生活の疲れが大きく出たり，学校生活のリズムについていけずに不適応を起こしたりしている子供もいる。また，休憩時間の終わりを告げるチャイムが鳴っても教室に戻らない，授業中に席を離れふらふらと立ち歩くなど，集団の学習に支障をきたす行動が見られるケースもある。

小学校１年生が，数か月過ぎても落ち着かず，学習が成立しない状況を「小１プロブレム」と呼ばれている。新保（2010）は，小１プロブレムの要因の一つとして，「就学前教育と学校教育の段差の拡大」を挙げており，「校区内にある保育所・幼稚園・小学校・中学校では，学びの連続性を意識した交流や連携が図られず，学校園はそれぞれが自己完結して，異校種に無関心だったこと。」と指摘している。

「小学校指導要領　第１章　総則　第４　指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」の２（12）には，「学校がその目的を達成するため，地域や学校等の実態に応じ，家庭や地域の人々の協力を得るなど家庭や地域社会との連携を深めること。また，小学校間，幼稚園や保育所，中学校及び特別支援学校などとの間の連携や交流を図るとともに，障害のある幼児児童生徒との交流及び共同学習や高齢者などとの交流の機会を設けること。」とあり，保・幼・小の連携・交流が提唱されている。また，「小学校学習指導要領解説　生活編」では，「小１プロブレムなどの問題が生じる中，小学校低学年では，幼児教育の成果をふまえ，体験を重視しつつ，小学校生活に適応すること，基本的な生活習慣等を育成すること，教科等の学習活動に円滑な接続を図ること」と，保育園・幼稚園と小学校の接続（以下，幼小接続）を奨励している。

ところが，文部科学省は，2015年４月の「幼児教育，幼小接続に関する現状について」の中で「ほとんどの地方公共団体で幼小接続の重要性を認識（都道府県100％，市町村99％）。その一方，幼小接続の取組は十分実施されているとは言えない状況（都道府県77％，市町村80％が未実施）。」という調査結果を出している。「接続関係を具体的にすることが難しい（52％），幼小の教育の違いについて十分理解・意識していない（34％）」が主な理由となっている。

柏崎市では，平成24年度から26年度までの３年間「保幼小スマート入学プロジェクト」という教育委員会の事業を行っている。いくつか小学校区を指定し，各校園の年長児と小学校１年生を対象としたプロジェクトである。推進チームとして，子ども課・子育て支援センター・学校教育課から７名が参加し，各保育園・小学校に訪問する。検討会や経過報告会を適時に開催して，小学校・園の管理職や担任，特別支援コーディネーターで協議をし，推進チームより指導助言を受けながら進めていくプロジェクトである。

当校は，小学校区にある２つの保育園と共に平成26年度に指定を受け，このプロジェクトに取り組んだ。小学校入学という大きな段差を埋め，スムーズに小学校生活をスタートできるようにするため，年長の時期に準備できることにはどういうことがあるか，先輩になる１年生からどんなアプローチをしていくことができるか，それら取り組んだことにどんな効果が見られるのか，検証していく。

2　研究の目的

小学校入学期において，子供たちが安心していきいきと学校生活を楽しむ姿を具現化するために，スマート入学プロジェクトの取組としてどのような手立てが有効であるか，明らかにする。

＊ 柏崎市立半田小学校

3　研究の内容・検証方法

(1)　実践の構想

①　園と学校での共通課題の設定

当校の１学年は，61名（１組31名，２組30名）。６月，当校で１学年の授業参観を行った後，第１回目の協議会をもった。各園と学校の子供たちのよさと課題を話し合いながら，共通取組課題を明らかにしていった。そして，図１のように共通課題を設定し，各園と小学校でそれぞれの子供の実態と発達段階に応じた指導の手立てをとっていった。

プロジェクトにおける共通課題
◎小学校に入学しても自分の力を発揮できる，ジャンプできるようにしたい。
そのための力を身につける。そして，親もジャンプできる力をつけたい。
そのための力とは……　①　話を聞く力
②　自分の思いや考えを伝える力
③　家の人に，連絡内容や今日あったことなどを話せる力

A保育園の取組
①　話を聞く力
・話を聞く姿勢を身につける。（イラスト・写真を導入）
・話を始める合図を出す。（全員静かになるまでの数秒を伝える。）
・体操教室に参加する。（園の先生ではない外部の指導者の話を聞き，理解して行動する。）
②　自分の思いや考えを伝える力
・当番活動で発表の場を作る。
・行事での全体集会でステージに立って発表する。
・グループの制作や活動では，話し合って作業を進める。
③　家の人に，連絡内容や今日あったことなどを話せる力
・帰りの会で一日の振返りをし，その日あったことを思い出したり次の日の活動で必要なものを伝え合ったりする。
・早寝・早起き表を作り，親子でできる活動を呼びかけ，一緒に取り組んでもらう。

B保育園の取組
①　話を聞く力
・聞く姿勢の大切さを伝え，子供たちが話に集中できる姿勢を確認してから話し始め，子供たちが考える場面を入れて話に集中させるようにする。
②　自分の思いや考えを伝える力
・どんな活動も子供たちと一緒に考え始め，大きな行事も保育者中心でなく，子供たちが自分で考えられるようにする。
③　家の人に，連絡内容や今日あったことなどを話せる力
・「宿題ごっこ」で子供たちにおうちの人に話してほしいことを伝える。

C小学校の取組
①　話を聞く力
・全校で共通に，話す・聞く力を育てるＳＳＴの実施。
・全教室に「あたたかい聞き方・やさしい話し方」の話形掲示。
・話を聞く時の姿勢について，「ペタ・ピン・グー」の合言葉。
②　自分の思いや考えを伝える力
・日直のスピーチ・質問タイム，「ほめほめシャワー」など。
③　家の人に，連絡内容や今日あったことなどを話せる力
・連絡帳への一言日記。（家庭で今日の出来事を話すきっかけとなるように）

図１　プロジェクトにおける共通課題と各園・小学校の取組

②　途切れない交流活動や出前授業

取組前には，図２のように，保育園から小学校へ出向く活動が「校内マラソン大会」と「音楽発表会リハーサル」という２回の学校行事ぐらいであった。小学校から保育園へ訪問することはほとんどなく，保育園の職員の顔や名前もよく知らないような状態だった。

プロジェクトの指定を受け，図３のような年間計画を立てた。図２と図３を比較して分かるように，取組前に比べ，１年生が保育園へ訪問したり園児が小学校で給食体験をしたり，目的を明確にした交流の機会を頻繁にもつようにした。小学校教諭による保育園での出前授業も新たに計画した。

取組前

小学校区	
保育園（A保育園，B保育園）	小学校
	6／上旬　第１回保幼小連絡会（１年生授業参観，情報交換会）※入学児童の出身園に案内
9／下旬　校内マラソン大会応援	
10／下旬　校内音楽発表会リハーサル鑑賞	
	10／下旬　第１回移行学級・就学時健康診断
	2／上旬　第２回保幼小連絡会（就学児引継）
	2／中旬　第２回移行学級

図２　取組前の交流活動

⑵　検証方法

スマート入学プロジェクトの取組を受けずに入学した１年生（平成26年度入学）と１年間プロジェクトの取組を受けて入学した１年生（平成27年度入学）の１クラスについて，学校生活アンケート，Ｑ－Ｕ検査，学校評価アンケート（児童分・保護者分）の結果を比較する。なお，対象のクラスは，26年度と27年度で同じ教諭が担任となっている。

４　取組の実際

⑴　園訪問

１年生の子供たちが，二つの園に訪問する機会を増やした。

９月には，「校内マラソン大会」の開催と，生活科で飼育するやぎが小学校に来たことを知らせるポスターを作り，それを持って１組がＡ保育園に，２組がＢ保育園に訪問した。そして，国語の音読劇を見せたり，一緒に踊りを踊ったりする活動をした。また，園からも，年長児を中心に発表が行われた。

10月下旬から11月上旬にかけては，校内音楽会で発表した曲目をもってそれぞれの園を訪問し，年長児だけでなく全園児と職員が鑑賞する中，演奏を行った。それぞれの園からもまた発表が行われた。園児も児童もお互いの発表のときに，静かに真剣な態度で聞いている姿が印象的だった。

子供たちが活動のめあてを考える際に，「保育園の先生や年長さんたちに見てもらう」という相手意識をもち，「丁寧に書いたり色を塗ったりしよう」とか「かっこいい演奏に見えるように姿勢よくしよう」など，前向きに取り組むことができた。

取組後（平成26年度）

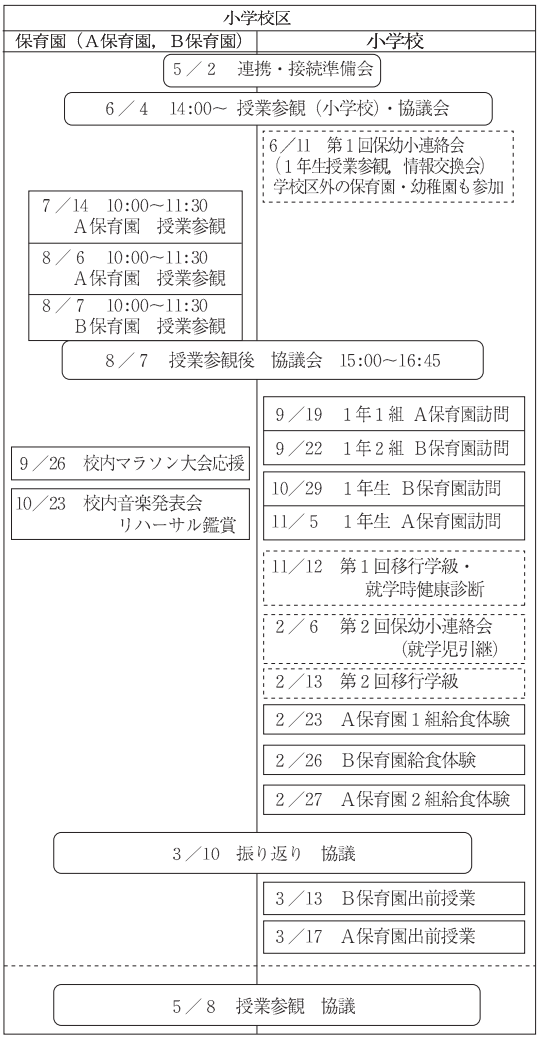

図３　取組後の交流計画（Ｈ26年度～）

⑵　体験給食

２月の下旬には，年長児が担任の先生の引率のもと小学校に来て，給食を１年生のクラスで一緒に食べる「給食体験」を行った。Ａ保育園は，年長クラスが２組あり，１クラス20人前後いるので，１回に１クラスを実施した。１クラスが半々に分かれ，１年１組と２組各クラスに10名ほどが入って，１年生と一緒に給食を行った。Ｂ保育園は少人数であり，卒園生が１年２組にいるので，全員が１年２組で食べた。

１年生は，机をグループに配置して，園児の座る椅子を用意し，園児を迎えることを楽しみにしていた。配膳の場面では，お盆の上におかずの皿やごはんなどを順にのせていくのに付き添いながら，お盆が傾かないように手を添えてお茶碗をのせてあげたり，園児に食べられる量を聞いたりして気遣っていた。

園児は，配膳の時に静かに待つことや，食べ始めてから放送の音楽が終わるまでのもぐもぐタイムにおしゃべりをしないで食べることなど，指示を理解することができた。少し緊張した様子ではあったが，盛られたものを残さないようにと一生懸命に食べていた。１年生に励まされながら，ほぼ全員が完食することができた。この体験により，小学校の給食への自信がついたものと思われる。

行動や食べ方など，園児一人一人の様子をよく観察できる機会にもなった。要支援児についても貴重な情報を得ることができた。

⑶　出前授業

３月中旬，小学校入学に向けての気持ちが高まっているこの時期に，小学校教諭による保育園での出前授業を行った。教務主任と特別支援コーディネーターの２名で訪問した。

ダーク系のスーツとネクタイ姿の男性の教務主任が，授業を担当した。内容は，学校の一日の流れ，教科書の紹介，ランドセルを背負った状態で体操着袋を背負う練習，読み聞かせ等である。真剣に話を聞いている様子が見られた。

特別支援コーディネーターは，児童の観察を行った。要支援児の様子や，要支援児以外に移行学級の際に気になった

子供の様子を見ることができ，情報を収集することができた。子供の顔を見ながらその場で保育園の職員と情報交換をすることができたので，非常にわかりやすかった。入学後の日常的な支援体制を考える上で大いに参考となった。

(4) 聞く・話す力を高める全校ＳＳＴ

当校では，数年前から全校ＳＳＴを継続的に行っている。第１回目のテーマは，「あたたかい聞き方をしよう」を設定した。教師による役割演技を見せ，望ましくない聞き方と望ましい聞き方を比較させた上で，「あたたかい聞き方」とはどういうものかを指導した。各クラスには，図４の掲示をし，日常や授業中の話を聞く場面で意識できるようにした。また，その後のＳＳＴの機会に「やさしい話し方」のスキルを扱った。

図４　「あたたかい聞き方」「やさしい話し方」の掲示

５　実践の結果と分析・考察

(1) 学校アンケートから

児童を対象として，毎年６月と12月に行っている学校アンケートについて，プロジェクト実施前のＨ26年度入学児童（30名）と実施後のＨ27年度入学児童（28名）の６月のデータを比較した。なお，担任は同じ教諭である。

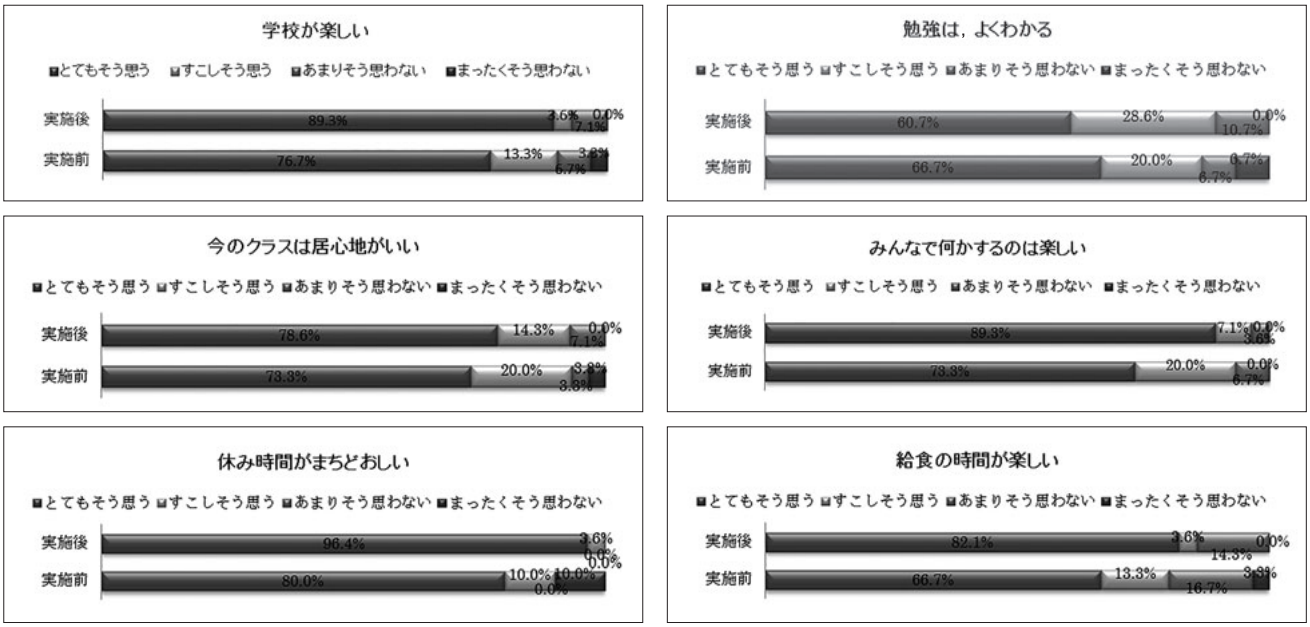

図５　「学校アンケート」のプロジェクト実施前後の比較

「勉強は，よくわかる」の１項目以外は，５項目で実施後の「とてもそう思う」が実施前より高い数値になっている。「勉強は，よくわかる」の項目も，「とてもそう思う」と「すこしそう思う」を合わせた肯定数で比較すると，実施後の方が高くなっている。

毎年６月に行われる知能検査の結果について，知能偏差値の学級平均を見ると，実施前（H26年度入学児童）の学級平均は54.1となっており，全国基準値に比べて高い知的水準であると判断されている。一方，実施後（H27年度入学児童）の学級平均は46.0となっており，知的水準は低いと判断されている。その差が学習の理解の度合いにかなり影響を与えているものと推測できる。

(2) Ｑ－Ｕ検査の数値比較から

当校では，学校生活アンケートと同じ時期にＱ－Ｕ検査を実施している。Ｑ－Ｕ検査では，一人一人の学級生活の満足感や意欲，学級集団の雰囲気や成熟状態などを把握することができる。６月のデータについて，実施前（Ｈ26年度）と実施後（27年度）を比較する。

実施前（26年度）　　実施後（27年度）

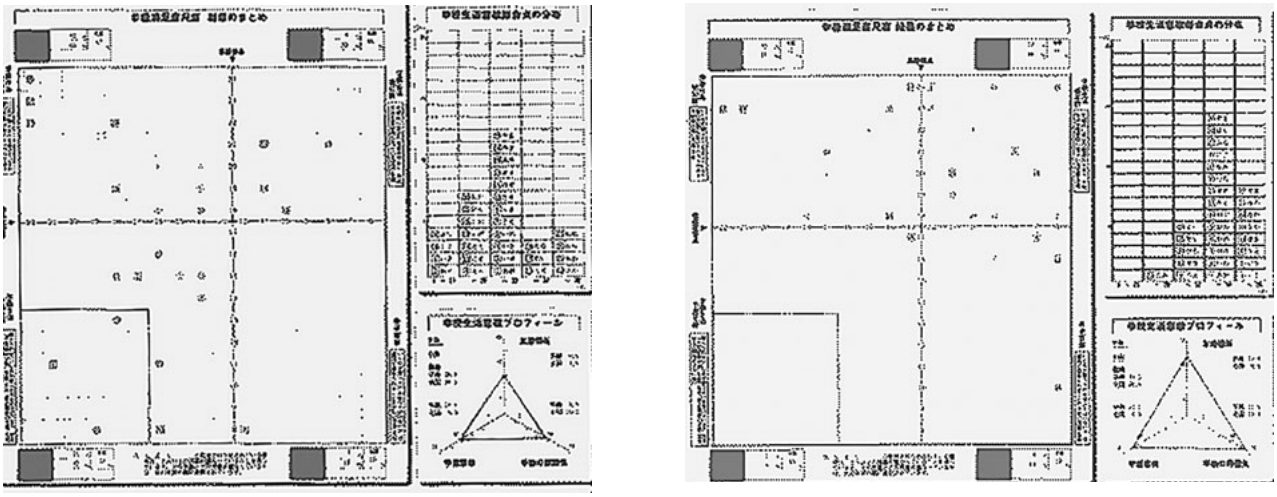

図６　Ｑ－Ｕ検査の結果

図６，図７のように，プロジェクト実施前は，不満足群や侵害行為認知群の数値が高く，満足群の数値は低くなっており，児童は様々な不安や不満を感じながら生活していることが分かる。学校生活意欲総合点の分布では，真ん中の山が一番高くはなっているが，やや下方に偏りが見られる。学校生活意欲プロフィールでも，「友達関係」と「学級の雰囲気」では全国平均を下回っていて，三角形の面積が小さくなっている。

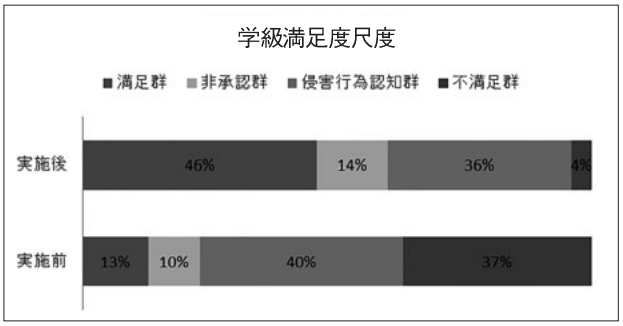

図７　学級満足度の比較

実施後は，分布図がかなり右上の満足群に近い所に集まっていることが分かる。１年生という発達段階として，自己中心的な面や衝動的な面があることから侵害行為認知群が多いものの，満足群が半数近い高い数値となっており，全国平均を上回っている。注目すべきは，不満足群が大変少ないことである。不適応を起こしたり，学級の中で自分の居場所を見いだせないと感じたりしている子供がほとんどいないと言える。学校生活意欲も右寄りの高い方に集まっており，意欲が高いことを表している。学校生活意欲プロフィールでは，３項目とも全国平均を上回っており，大きな三角形ができている。

(3)　学校評価アンケート

毎年，７月に児童と保護者を対象に学校評価アンケートを行っている。その中で，「聞く・話す」「家の人に伝える」「自己肯定感・満足度」の項目について，純肯定値を比較した結果が図８である。

いずれもプロジェクト実施後の数値が高くなっている。話を聞くことに関して，児童の意識としては実施前後の数値にあまり差はないが，保護者の評価は実施後に大きく伸びている。実施前は，児童はほとんどが聞いているつもりでいるが，聞き方に満足している保護者は半数以下である。一方，実施後は，聞いているという評価が75％に上っている。

子供が親に学校での話をし，伝えることができているために，保護者の教育活動に対する満足度が高くなり，また，学校と保護者の安定した関係の下，児童の自己肯定感も高くなっているものと推測できる。

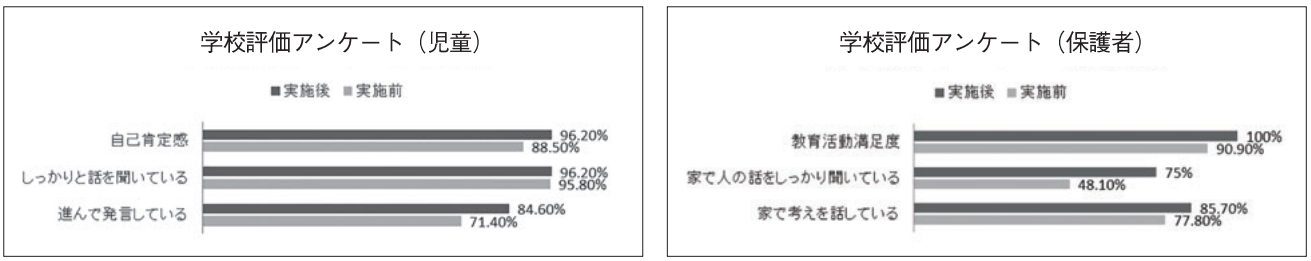

図８　学校評価アンケートの結果　（純肯定値）

(4) 考察

これらのことから，子供たちが安心していきいきと学校生活を楽しむ姿を具現化するために，年長の時期に小学校入学を見据えての準備をする時，保育園と小学校が同じ方向を向き連携して取り組むことや，目的を明確にした交流の機会を数多く設定しながら，「保幼小スマート入学プロジェクト」を行っていくことは有効であった。めざす子供の姿を共有し，保小共通理解のもと，交流活動や体験活動に取り組むことは有効である。

6　全体のまとめと成果

「スマート入学プロジェクト」を経て入学してきた子供たちは，明るく元気なあいさつや返事ができる児童が多く，同学年や他学年の児童，職員とのかかわりを楽しんで学校生活を過ごす様子が見られた。

入学してきた子供たちの何人かから，出前授業を行った教務主任に，「体操着袋，背負う練習をしたよ。」という声が掛けられたという話を聞いた。例年，４月の週末の下校時は，一人でできずに泣く，人混みの中で背負う動作をして友達に当たるといったトラブルが起き，大騒ぎになる。ところが，今年は，担任が手伝わなくても背負えた子供がほとんどで，スムーズに帰りの支度を終えることができた。出前授業を行った成果である。こういう細かいことが，スムーズな接続につながっている。

給食の配膳は，高学年の手伝いなどがなくても，自分たちだけでスムーズに行うことができている。配膳中にお盆や食器を落とすようなこともほとんどない。また，全体的に残食が少ない。

学級の中では，１年生らしくはしゃいだ雰囲気になることもあるが，全校での活動などでは，場の雰囲気に合わせて静かに行動することができている。入学式や１年生を迎える会でも，一人一人が堂々と返事をし，自分の名前を大きな声で言うことができた。

プロジェクトの取組が始まってからは，保育園と小学校の職員同士が協議会で顔を合わせる機会が多くなり，話合いの場を通してお互いの考えを知り，つながることができた。夏の保育園訪問では，体操している様子やプールに入っている場面，裏山での活動など，様々な活動の様子を参観することができた。保育園の環境や担任の話し方など，いろいろな面で小学校とは違うことが，実際に参観することでよく分かり，参考にすることができた。

保護者からは，「保育園の先生から，小学校入学に合わせた生活リズム等の話をたくさん聞き，入学を前に家庭でも意識をして日々の生活を過ごすよう心掛けた。」「就学に向けて安心感を持つことができた。」という声があがった。保護者の気持ちが安定することで，子供たちも安心して学校生活をスタートさせることができた。協議会等の検討時に，保育園と小学校で何が大切かをすり合わせた成果である。

受け入れる小学校の1年生にとっても意義ある取組であった。「新しい１年生に見せよう，教えよう」という学習課題は，１年生にお兄さん，お姉さんとしての意識を高めた。

市の指定が終わった後も効果のある活動は継続して取り組んでいくことが決まり，新たな取組として，小学校で行われる１年生の研究授業を参観してもらい，小学校の授業で何を大切にしているかの理解を深める場を設定した。

7　今後の課題

小学校区の保育園との接続には効果があったが，入学してくる児童は，年によって小学校区以外の園から入学する児童の割合が多くなることもあり，経験の差が影響することがある。今後は，他園も視野に入れながら保・幼・小の接続を見直し，より一層の連携を図るとともに，小学校入学後のスタートカリキュラムについても研究を深めたい。

引用・参考文献

河村茂雄　藤村一夫　浅川早苗　「Ｑ－Ｕ式脱・小１プロブレム『満足型学級』育成の12か月学級づくり」図書文化，2008年
新保真紀子「就学前教育と学校教育の学びをつなぐ　小1プロブレムの予防とスタートカリキュラム」明治図書，2010年
髙階玲治　「幼・小・中・高の連携・一貫教育の展開」教育開発研究所，2009年
文部科学省「小学校指導要領」2008年
文部科学省　「幼児教育，幼小接続に関する現状について」2015年
幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続のあり方について（報告）」2010年